

「多くの命を守るため」

和歌山県 近畿大学附属和歌山中学校 1年 楠本 明日香

濁流と化した河川、寸断された道路。住宅地には大小の岩と大量の土砂でできた土石流が流れこみ、呆然とする住民や救助に向かう人々。多くの報道陣で混乱し、悲鳴混じりの声と水の流れる音がしていた。——これは、平成 23 年 9 月紀南地方に大きな被害をもたらした大水害の現場に、警察の救助活動部隊として行った父から聞いた当時の現場の状況です。それから 7 年後、平成 30 年 7 月豪雨のテレビのニュースで、父が語った同じ状況が映し出されていました。また、その間にも日本各地で自然災害が発生し、その度死者何人という事を耳にしました。なぜ、このようなことが繰り返されるのでしょうか。警察で災害対策のお仕事をしている父と一緒に考えてみました。

平成 23 年 9 月に発生した紀南大水害では、速度が非常に遅い台風第 12 号の影響で、県内南部を中心に大雨が降り続き、このため、各地で河川が氾濫し、土石流や深層崩壊と呼ばれる土砂崩れが発生したそうです。父は、「自分らが現場に行った時には、すでに遅かった。」「多くの方がお亡くなりになっていて、県民の方の命を守れなかった。」と悔やんでいました。今年の 7 月に発生した平成 30 年 7 月豪雨でも、台風や活発化した梅雨前線の影響で大雨が降り、河川の氾濫や土砂崩れなどにより、多くの方がお亡くなりになりました。私も自由研究で土砂崩れの仕組みや命を守る方法を研究しましたが、土砂崩れは山の斜面があればどこでも発生しますし、土砂崩れに巻き込まれば命が助からないことを学びました。自然災害を防ぐことはできないのでしょうか。

自然災害を防ぐことができなくても、自然災害から身を守ることはできるのではないのでしょうか。平成 30 年 7 月豪雨では、テレビのニュースアナウンサーが命を守る行動を呼びかけていました。私の住んでいる地域にも避難準備情報が発令され、私たちは、家の周りが浸水する可能性があったので、祖父の家に避難しました。なぜ、みんなは逃げ遅れたのでしょうか。「災害に対する危機意識が薄れてきている。」と父は言います。私たち家族は、父から、地震や水害の怖さを度々教えられ、警報や避難指示が出ると、こわいこわいと思います。しかし、災害の経験がない人や、今まで被害にあったことのない人は、「私のところは大丈夫」と油断してしまっているそうです。

父は、今回の災害で、町の大部分が浸水した岡山県真備町に行きましたが、町の人が「まさか、こんなことになるとは思ってもいなかった。」と語っていたことを教えてくれました。予想していなかったことに備え、念のため避難しておく大切さを改めて感じました。一方で避難したくても、できなかった人もいるということを知りました。実際、岡山県の真備町では、避難することが難しいお年寄りの方が被害にあっていたそうです。父から、「今住んでいる地区に、一人暮らしの高齢者や、高齢者だけの世帯がどれだけあるか知ってるか。」と聞かれましたが分かりませんでした。地域で、お年寄りや障害のある方が、どこに、何人住んでいるかを知っておくことや、避難するときは、声をかけて一緒に避難することも大切なのだそうです。まずは、自然災害に対する危機意識を高め、そして、地区で避難訓練や災害に備えた話し合いをするなど、災害に強い地域を作ることが大切だということを知っていただきました。

以前、父から津波避難 3 原則を覚えてもらったことがあります。その中に、「率先避難者になれ」という原則があります。自分が先に避難すれば周りの人の危機感を高め、避難しようとする気持ちにさせるので、自分や家族、廻りの人たちを助けることができるのだそうです。私はもっと災害のことを勉強し、父のように子どもに災害の怖さを教えて、家族が悲しい目にあわないようにしたいと思います。また、災害が発生しそうな場合は、率先避難者となって多くの命を守りたいです。これまで、災害で犠牲になった方々が残してくれた尊い教訓を、決して無駄にすることのないように、ひとりでも多くの命を守るができるように、日々尊い教訓を胸に生活していきたいと思えます。